

【論文】

明治後期における川村清雄の作品売買の一樣相 —川村家の親族と三井系人脈の關係にみるパトロネージの実態—

落合則子*

目次

はじめに

1. 川村家の親族關係と三井系人脈
2. 井桁商会による油絵販売斡旋と川村家
3. 川村清雄の藝術を愛した親族たち

おわりに

キーワード 川村清雄 江原素六 三井物産 井桁商会

はじめに

美術史においてある時代ないしある作家の藝術に影響を与えこれを規定する主要な要素として、作家とパトロンあるいは顧客との關係があることは言をまたない。近代日本洋画史においても、画家の藝術を愛し支援したパトロンや注文主たちの階層と趣向がその榮枯盛衰に大きく影を落とした。とくに明治20年代後半から30年代という時代は、日清戦争から日露戦争へと展開する歴史情勢の中で東アジア世界に市場を得た軽工業を中心とする産業が急速に発展し、これにより富を得たいいわゆる産業ブルジョワジーが興隆した時代であった。これにともない、明治前期において皇族や官僚、軍人が中心であった美術のパトロネージが、日清戦争以降新興の産業ブルジョワジーに広がっていった。¹⁾

財閥系の実業家による洋画家へのパトロネージの早い事例については、明治20年代後半に黒田清輝が在仏中からの知己である西園寺公望の紹介をきっかけに西園寺の実弟であり財閥住友家へ養子に入った住友友純の支援を受けたことが知られる。²⁾ 黒田が留学中に制作した「朝妝」は、彼が仏国留学を終え帰国して間もない頃の明治28年(1895)に西園寺の仲介でもとの所有者であった野村靖から住友の手に渡った。これが機縁となり、黒田は住友から月100円の潤筆料を受け大作「昔語り」を制作した。その後黒田が東京美術学校に迎えられてからは、住友は次にパリに留学中の鹿子木孟郎のパトロンとなって彼の留学費用を援助、鹿子木がパリで模写した洋画は須磨にあった住友邸の壁を飾った。また、岩崎弥太郎が創始した三菱財閥の岩崎家は、黒田の「裸体婦人像」を高輪別邸に飾り、山本芳翠など主に白馬会系の新派の洋画を収集したことが知られる。新興財閥と白馬会系画家との親密な關係は、黒田が薩摩藩出

*東京都江戸東京博物館学芸員

身の華族であったことや岩崎が土佐藩出身で藩や明治政府と深くつながった政商であったことなどがその背景にあるといわれている。³⁾

それでは、川村清雄についてはどうだろうか。彼が幕臣の出身であり、徳川家や勝海舟など旧幕府の有力者がパトロンとなっていたことは周知の事実である。⁴⁾しかしそれだけではなく、清雄の周辺には川村家を取りまく親族で政財界において活躍した人々とこれに連なる人脈からなる強力なパトロネージが存在していたことが、江戸東京博物館所蔵「川村清雄関係資料」(以下「川村資料」とする)から見出すことができる。本論では、「川村資料」を中心に具体的な事例を紹介し、明治後期における川村清雄の芸術の受容者とその特徴を考えていきたい。

1. 川村家の親族関係と三井系人脈

まず、本論の前提および背景となる川村清雄の出自と親族関係について述べたい。川村家が將軍直属の隠密御用を務めた御庭番の家筋であったことは知られているが、その親族関係もまた幕臣人脈に源を発する特色あるものであった。

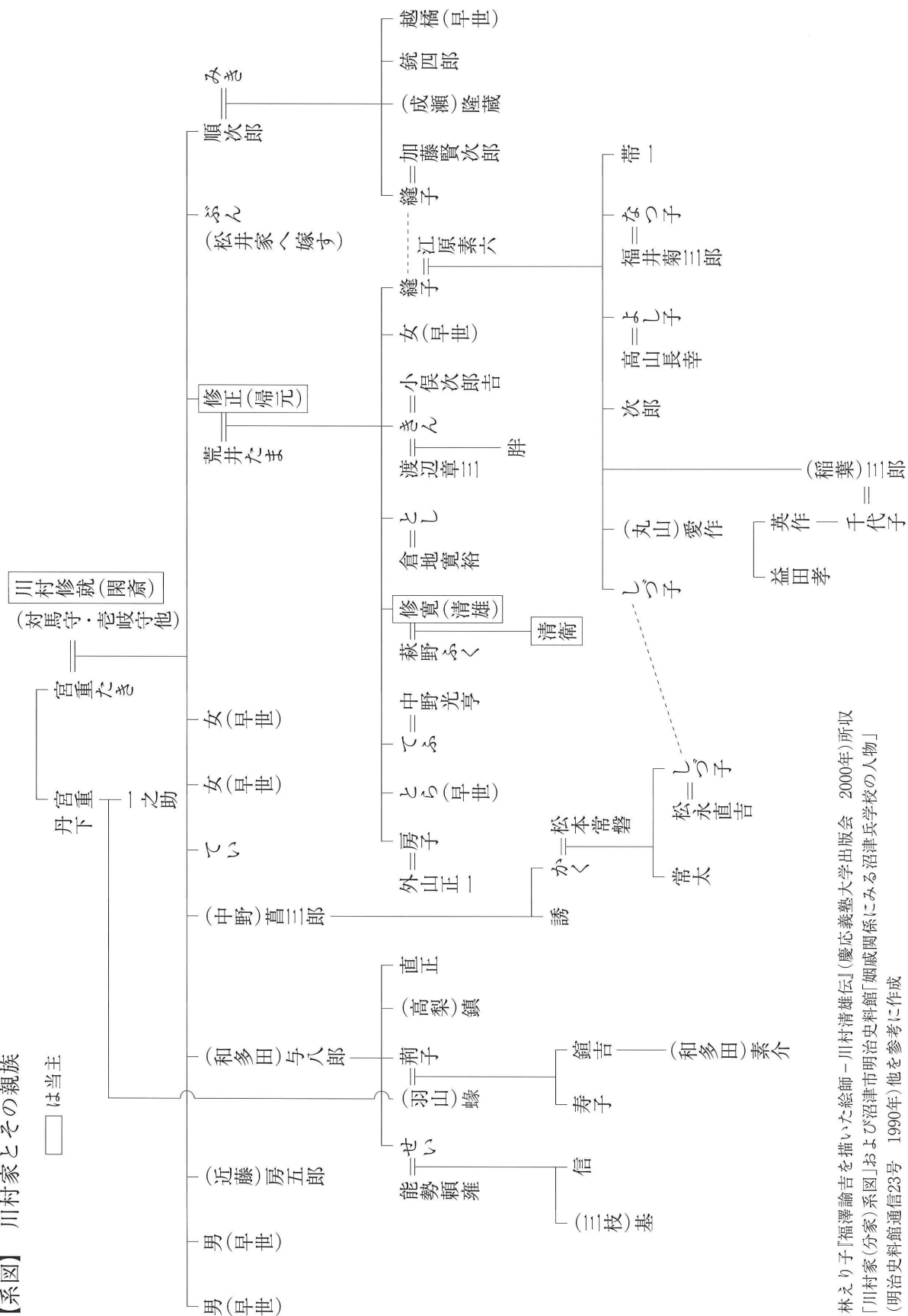
【系図】に川村家の親族関係図を掲げた。清雄の父帰元(諱は修正で帰元は隠居後の号である。本論では帰元の名で統一する)は初代新潟奉行川村修就の次男であったが、長男の順次郎が病弱のため惣領となり川村家を継いだ。帰元の子は、長男清雄(諱は修寛)がただ一人の男子であり、他に6人の娘がいた(うち2人は早世)。長女きんは初め旗本小俣家に嫁して維新後再縁し、二女としは御庭番の倉地寛裕に嫁した。三女てふと四女房子は維新前はまだ年少で、明治になってからてふは東京府の役人中野光亨と結婚し、房子は静岡学問所教授で後に東京帝国大学総長となる外山正一の妻となった。しかし帰元には、さらにもう一人の娘がいた。それは、順次郎の三女で帰元の養女となった縫子である。彼女が明治大正期に政治家として活躍した江原素六の妻となったことは知られているが、この江原夫妻を軸にして川村家と政財界との人脈が存在していたことは意外と注目されていない。この頃では、川村家の親族中で政財界において活躍した人々の顔ぶれとその特徴を見ていくこととする。

まず、川村家と政財界とを結ぶ人脈のキーパーソンとなるのは、江原素六である。江原は下級幕臣の出身で、講武所教授等を経て慶応4年(1868)撤兵頭に任じられたが、江戸開城前に江戸を脱走し市川船橋戦争を戦った。敗戦後一時潜伏ののち静岡に入り、沼津兵学校の設立と運営を担った。廃藩置県後は静岡の地で開墾や茶の輸出業などさまざまな事業を手がけ、明治23年(1890)第1回衆議院議員選挙に当選、立憲政友会の結成に関わり以後政治家として活躍した。彼はまたキリスト教指導者の一人として知られ、麻布中学校の創立者でもある。

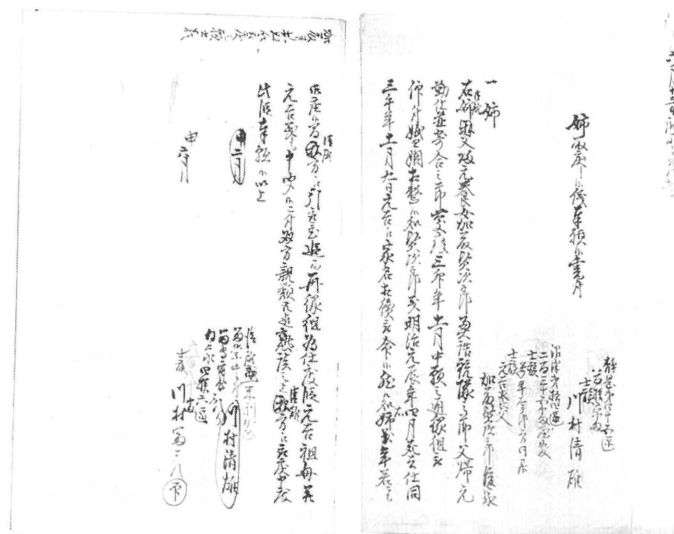
さて、江原は静岡藩少参事として明治4年(1871)アメリカ視察をしたその翌年2月に川村縫子と結婚した。彼女は清雄より1歳年上の嘉永4年(1851)の生まれである。⁵⁾この縫子が実は再縁であったことが、「川村資料」から明らかとなった。本論の主題からはいささか離れるが、後に論ずるところの伏線となるのでやや詳しく紹介しておきたい。

明治初期から30年頃にかけて川村帰元が川村家の家族や住所の異動に関する諸届書類の写しを綴った

【系図】川村家とその親族



※林えり子『福澤諭吉を描いた絵師－川村清雄伝－』（慶応義塾大学出版会 2000年）所収
「川村家（分家）系図」および沼津市明治史料館「姻戚関係にみる沼津兵学校の人物」
（明治史料館通信23号 1990年）他を参考に作成



【写真1】「東京寄留書面類扣」より縫子の川村家への復籍に関する願書写
江戸東京博物館所蔵

文書の冒頭に、縫子の再縁に関する願書が見出される。

【資料1】東京寄留書面類扣（資料番号03000898 【写真1】）

姉取戻し候儀奉願候書付

静岡第四十五区八百拾六番 士族 川村清雄

一、姉 沼津第拾四区二百三十五番屋敷 士族万年太郎方同居

士族元吉養父加藤賢次郎後家

右清雄姉父帰元養女、加藤賢次郎奥詰銃隊之節父帰元勤仕並寄合之節慶応三卯年十一月中願之通縁組被仰付婚姻相調候処、賢次郎義明治元辰年四月死去仕、同三年十一月九日元吉え家名相続被命候、然ル処右姉義年若ニも御座候間、清雄方え引取置迫而再縁組為仕度段元吉祖母并元吉義も申聞候ニ付、双方親類共迄熟談の上清雄方え取戻申度、此段奉願候、以上

申六月

清雄亜米利加国留学中ニ付留守預り同家四拾六区六百八十番

士族 川村富彦（印）

（句点等は筆者が適宜施した。以下同じ。）

この願書によると、縫子は慶応3年（1867）11月に奥詰銃隊の加藤賢次郎と結婚したところが、賢次郎が慶応4年（1868）4月に死亡し、明治5年（1872）6月に再縁のため実家の川村家へ籍を戻したということである。これにより、縫子は賢次郎との婚姻の時点ですでに帰元の養女となり清雄の義姉となっていることがわかる。なおこの願書の前に綴られているもう一通の願書は、賢次郎の死亡を4月23日と記している。

加藤賢次郎という人物は、慶応3年の仏語伝習希望者名簿の中に「奥詰銃隊 加藤賢次郎」とその名が確認される。賢次郎が死亡したとされる慶応4年4月23日は、戊辰戦争の一齣である宇都宮戦争で旧幕府軍が新政府軍に敗れた日である。同年正月の鳥羽伏見の戦いから徳川慶喜の謹慎と江戸城明け渡し

へと激変する情勢下で、旧幕府陸軍の中では新政府軍へ抗戦すべく江戸を脱走する者が相継いだ。大鳥圭介率いる伝習隊を主とした一軍は、4月11日に江戸を脱して下総の市川国府台に集結したのち下野方面を目指して進軍した。この時加藤賢次郎も大鳥軍に加わったものと思われる。⁷⁾ 宇都宮戦争における大鳥軍は一時宇都宮城を奪取するが、4月23日の戦いで新政府軍の反撃に敗れ城を撤退、日光へ移った。この時に賢次郎は戦死したのであった。川村修就の日記「日新記」⁸⁾には、その2年後の明治3年4月14日に賢次郎戦死の報を受けた次のような記事がみられる。「加藤之隠居駿河台万年ノ弟之方ニ止宿之处、今井繁吉郎と云者尋来ル、同人ハ加藤賢次郎同隊ニて差図役之同役にて、賢次郎討死之事を為知ニ来りし也、一昨明治元辰年四月廿三日宇都宮駅壬生海道ノ方より寄ル敵と戦ひ鉄砲ニて胸板ヲ被打抜討死、其節同し差図役芝崎久次郎土屋万之助も討死、此兩人ハ首を打賢次郎ハ髪ノ毛を切右繁吉郎日光へ持行、同所杉本坊へ頼三人一所ニ墳ヲ建しと云」。また同じく4月23日条には「今日加藤忌日ニ付膳を備へる」と、修就が賢次郎の命日に供養をしたことが記されている。縫子が江原素六と再婚したのは、賢次郎の戦死の報が川村家に届いてからおおよそ1年後のことであった。⁹⁾ 江原は、清雄の渡米に一足遅れて視察のためにアメリカへ渡り、明治4年（1871）7月（陽暦8月）にニューヨークで清雄と会って縫子との婚約を告白した。¹⁰⁾

さて、次に江原夫妻および川村家と政財界を結ぶ親族としてもう一人の柱となるのは、成瀬隆蔵である。彼は川村修就の長男順次郎の次男で縫子の実弟であり、江原との関係からみれば義弟にあたる。通称は範三郎。安政3年（1856）に生まれ、旗本成瀬家の養子となった。¹¹⁾ 維新後静岡へ移住し、沼津兵学校の第7期資業生として学んだ。明治5年（1872）同校が陸軍省の管轄となり閉鎖された後上京して慶応義塾に入学するが、やがて明治8年（1875）に発足した商法講習所（のち東京商業学校、現在の一橋大学）に移り、同10年（1877）講習所最初の卒業生となった。卒業後ただちに同校の教師となり、17年（1884）同校が東京商業学校に改組されると教授兼幹事を勤めた。明治25年（1892）大阪商業学校に転任、その後明治28年（1895）に同校を辞して、三井物産が上海紡織会社を設立すると創立委員となりのち支配人となった。さらに翌29年に三井大元方に招かれた。その後も三井各商店重役会書記長、管理部書記長等を経て、三井同族会教育部主事、三井合名会社理事等の要職を務めている。¹²⁾ 成瀬は川村家の三井系人脈の一角として、また清雄が持っていたもう一つの大きな人脈である東京商業学校との関わりにおいて特記すべき存在である。

さらに江原素六の娘婿たちの顔ぶれを紹介していきたい。まずは長女なつ子の夫福井菊三郎である。福井は、¹³⁾ 慶応3年（1867）江戸麹町の中村家の三男に生まれた。中村家は將軍家の御畳大工を勤める御用達三家の一つであったが、¹⁴⁾ 菊三郎はのちに福井家の養子となった。明治13年（1880）に当時成瀬隆蔵が教鞭を執っていた東京商業学校へ入学、同16年（1883）に卒業するとただちに三井物産¹⁵⁾に入社した。当時の三井物産によるいわゆる「学卒者」採用の一人である。福井は明治25年（1892）シンガポール支店長となって海外に渡航、その翌年に江原なつ子と結婚した。帰国後は本店営業部長等を務め、明治39年（1906）にはニューヨーク支店長として渡米した。その後明治41年（1908）には常務取締役役に任じ、団琢磨らとならび三井合名会社理事を勤め文字通り三井の総元締の地位を築いた。大正8年（1919）の¹⁶⁾ パリ講和会議には、日本代表団の一人として参加している。続いて、江原の次女よし子の夫は高山長幸

である。高山も福井と同年の慶応3年(1867)生まれで伊予大洲藩士の出身である。慶應義塾を卒業後、明治26年(1893)三井銀行に入行した。函館、深川、三池、長崎の支店長を歴任したのち、大日本製糖株式会社、明治石油株式会社、帝国商業銀行など数多くの企業の取締役を務めた。明治41年(1908)には衆議院議員に当選し、銀行家・実業家としてのみならず政治家としても活躍した人物である¹⁷⁾。高山も明治32年(1899)に江原よし子と結婚し、江原家の親族へ仲間入りをした。次は江原の三女しづ子の養父・松本常磐である。松本が明治27年(1894)に編輯発行した『宗海先生遺稿』によると、彼は出羽本荘藩の儒者であった皆川宗海の外孫という。宗海の子息平恪は藩の重臣で、維新後本荘藩権大参事および秋田県権典事を務めた。平恪は子のないまま宗海の死去した年と同じ明治8年(1875)に病死し、松本の弟が嗣子となった。「川村資料」中に、明治19年(1886)12月に三井物産から当時一等番頭席であった松本へ明治13年から同15年までの3か年における計算事務担当としての勉励に対し特別賞与を出す旨の賞状が伝えられており(資料番号03000908)、松本はこの頃から同社に勤務していたことが分かる。その後松本は、明治30年(1897)時点における参事主任から翌31年には監査方支配人となっていることが確認される¹⁸⁾。明治28年(1895)に江原しづ子が松本の養女となり、後に外交官の松永直吉に嫁した。なお後述するが、松本の妻かくは川村帰元の実弟中野菖三郎(楽遊と号す)の娘であった可能性が高い。

このほかにも、帰元の実弟和多田与八郎(一夢と号す)の娘せいを母とし、旧幕臣能勢家から養子に出た三枝基が、明治37年(1904)三井物産に入社している¹⁹⁾。三枝の入社にあたっては、三枝が帰元に宛てた書簡で「私事も無事日々三井会社へ出勤いたし福井氏方ニ御厄介ニ相成居樂しき日を送り居候間御安神可被下候」(明治37年12月7日付 資料番号03001026)と報告しており、当時大阪支店長として赴任していた福井菊三郎が周旋したことがわかる。

以上、川村家の親族の経歴をみてすぐに気がつくことは、同家が三井物産を中心とする三井系人脈によって固められているという特徴である。江原素六が三井物産の創業者益田孝と親しい友人関係にあり、益田の姪を三男の嫁に迎えるという姻戚関係まで結んでいたことはよく知られている。江原と益田の出会い、ハリスが駐在していた麻布善福寺のアメリカ公使館に益田が住み込んでいた当時公使館警備を江原が率いていたところからはじまる²⁰⁾。鳥羽伏見戦後の旧幕府陸軍人事では、江原は銃隊を率いる撒兵頭に、益田は騎兵を率いる騎兵頭に任ぜられた。戊辰戦争において、江原の方は結局戦いの道に引き込まれてしまったが、二人はともに陸軍総裁勝海舟の指示に従い兵の暴発を抑える役割を務めたのであった²¹⁾。そして江原は戊辰の戦乱に斃れた元同志の後家を娶ったのである。

木山実氏は近著において、益田孝が三井物産創業期に渋沢栄一や西周など旧幕臣とそれにつながる「旧幕臣ネットワーク」を活用して人材を集め、初期の三井物産の活動に投入したことを指摘されている²²⁾。江原素六との関係についても、江原が明治10年(1877)に静岡で起業してほどなく失敗した製茶会社「積信社」のアメリカ輸出事業を益田が支援し三井物産が3万円もの出資をした事実などから、二人の関係の親密さがうかがえるわけだが、そこには旧幕時代にさかのぼる深い縁があったのである。江原の娘婿たちのほとんどが三井物産の関係者で占められていたのは、およそこのような背景があった。こうして川村家の親族が、江原夫妻と成瀬隆蔵を中心にして三井系人脈に彩られていたという事実が浮かび上がるのである。

2. 井桁商会による油絵販売斡旋と川村家

＜川村家の困窮と金銭借用契約＞

前項では、川村家の縁戚關係の中から三井物産に関わる人脈を概観したが、本項ではこれを受けて川村清雄の作品制作と同社との関連について事例を追っていきたい。

清雄の留学にさいし、帰国後の出世を期待した両親は「安心して三千円の借金までもしてゐられた」²⁴⁾というが、清雄は帰国後ただちに迎えられた大蔵省印刷局を1年足らずで辞職、川村家の家計は窮地に陥りその後も慢性的な窮乏状態が続いた。長らく庇護を受けていた勝海舟のもとを離れ、明治28年(1895)から29年にかけて海軍省の依頼による「黄海之戦実景」を制作した後の清雄は、作画を監督した小笠原長生の保護を受けて同邸で作画活動を行っていた。小笠原は清雄の活計のために、親戚知人に声をかけ月掛けで清雄の作品の頒布を行ったという。²⁵⁾

清雄の両親で老齢の隠居の身である帰元・たま夫妻は、清雄が大蔵省印刷局を辞して定収がなくなり「貧乏で貧乏で碌々親爺にも小使さへやらぬ」²⁶⁾状況になってから、しばらくの間娘婿の外山正一から生活上の支援を受けていた。清雄と別居する帰元夫妻は、明治22年(1889)四谷区の住所から小石川区へ転居し、小石川水道町にある外山の所有地の管理をしていた。²⁷⁾また外山も、家計不如意の帰元に「貴所にも追々御年寄せられ候事故、他ニ事情出来せざる限りは相願候用事之多少ニ係はず一ヶ月三円宛ッ差上可申候間左様御承知可被成候」(川村帰元宛外山正一書簡 明治24年11月10日付 資料番号03001050)と月3円の援助をおこなった。その後清雄が小笠原長生の庇護を受けるようになって帰元も小石川の住所を離れたが、²⁸⁾米国留学中の清雄に絵画修業を勧め、川村家の直系の親族内でもっとも頼りになる存在であった外山が明治33年(1900)に53歳の働き盛りで病死したことは、川村家にとって少なからぬ衝撃であったと想像される。

この状況を打開するため、川村家の親族によりこの頃一つの手が打たれた。それが以下に述べる清雄の油絵販売を斡旋する事業である。まず紹介する資料は、「川村資料」中の一通の契約書である。次にその全文を示す。

【資料2】 追加契約証(資料番号04001465 【写真2】)

追加契約証(印紙に「CK」サインと「帰元」の割印)

一、今般油絵販売方ヲ貴商会エ嘱託候ニ付テハ合名会社井桁商会エ契約ノ条項總テ継襲シ履行可致候事、但シ負債金償還済ノ上ハ此約束取消ノ事

一、油絵販売手数料ハ売揚代金ノ二割ヲ納入候事

一、油絵引当借入金ニ対スル利子ハ年壹割八歩ヲ以計算可致候事

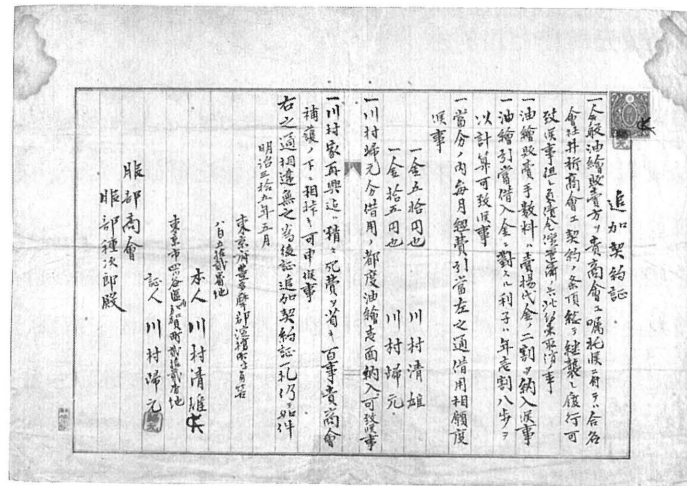
一、当分ノ内毎月经費引当左之通借用相願度候事

一、金五拾円也 川村清雄

一、金拾五円也 川村帰元

一、川村帰元分借用ノ都度油絵壹面納入可致候事

一、川村家再興迄ハ精々冗費ヲ省キ百事貴商会補護ノ下ニ相持キ可申候事



【写真2】 追加契約証
江戸東京博物館所蔵

右之通相違無之為後証追加契約証一札仍テ如件

明治三拾五年五月

東京府豊多摩郡淀橋町字角筈八百五拾貳番地

本人 川村清雄（「CK」サイン）

（ママ）
東京市四ッ谷区南加賀町貳拾貳番地

証人 川村帰元（「帰元」印）

服部商会 服部種次郎殿

この契約の内容を要約すると次のようになる。川村帰元と清雄父子は明治35年（1902）5月、服部商会の服部種次郎なる人物と油絵の販売委託契約を結んだ。それはこれより先に川村父子が行っていた合名会社井桁商会との契約を引き継いだものである。第2条以降に具体的な条件が記され、絵の売上代金の2割を手数料として川村家が服部商会に納めること、川村家が清雄の作品を引当に借金をする場合その利子は年1割8分とすること、川村家側の経費として清雄が月50円、帰元が月15円を借り入れること、帰元分の借り入れのさいには油絵1枚を納めること、川村家の負債が解決されるまではすべて服部商会の管理のもとに仕事を行うことを誓約している。

ここで、井桁商会について説明しなければならない。井桁商会は、明治32年（1899）に設立された合名会社である。その目的は豊田佐吉の発明による豊田式織機の製造販売であり、設立の背景には豊田の発明を見出した三井物産による全面的な支援があった。日清戦争後における紡績産業の急成長にともない、三井物産は棉製品を主要輸出商品として着目し、棉花輸入と棉糸紡績業を主要事業としてアジアに進出し著しい成長を遂げた。同社は、成瀬隆蔵が役員を務めた上海紡織会社をはじめインドのボンベイにも支店を置き原材料となるアジアの棉花を確保し、さらに国内で棉布を生産する力織機の導入についても、すでにイギリスのプラット社製の紡績機械を独占販売する契約を結んでいたその一方で、国内の紡績産業が軌道に乗ってきたのに合わせて国産の豊田式織機の導入と販売を決断したのであった。井桁商会の設立と三井物産との関係については、由井常彦氏が詳細な経緯を明らかにされており、ここでは

一部同氏の研究成果を借りながら論を進めていくこととする。

明治32年10月に開かれた三井商店理事会において豊田式織機への支援が決定され、11月豊田佐吉を技師長に迎えた井桁商会が設立されたが、同商会の設立に先立ち、名義上の出資者として三井物産から二人の社員が出てある合名会社が作られた。その二人とは、松本常磐と服部種次郎である。松本は当時三井物産において参事兼調査課支配人のポストにあり、服部は漁業本部部長であった。二人は10月の理事会決定後ただちに三井物産を罷役となり、翌月兩名を社員とする資本金3万円の「松本服部合名会社」³¹⁾が設立された。明治33年（1900）の会社役員録によると、東京深川区猿屋町に置かれた松本服部合名会社と東京日本橋区新大阪町に本店を置きまた名古屋市武平町に支店を置く井桁商会の社員には、松本と服部の二人が同じく名を連ねている。³²⁾

井桁商会は当初順調な滑り出しをし、豊田式織機に対し多くの注文が舞い込み、名古屋市内にあった日本車輛製造株式会社（現トヨタ自動車）の工場を使って注文に間に合わせるほどであったという。³³⁾この日本車輛製造株式会社も、松本常磐が監査役に就任している。³⁴⁾しかしまもなく経営方針をめぐる会社役員側と技師長豊田との意見が合わず、明治34年（1901）末までに豊田は井桁商会を辞した。発明家である豊田の持論が技術開発に重きを置き力織機の販売も制限受注にすべきとの考えであったのに対し、役員側が量産と営業実績の向上を優先したことが原因であったといわれる。『豊田佐吉伝』中の回顧談によると、この時松本は豊田よりも先に井桁商会を退社したという。³⁵⁾さらに時を同じくして、棉布の対中国輸出の不振で力織機の需要が冷え込んだことにより井桁商会は急速に業績が落ち込み、明治35年（1902）には3万円から1万円への大幅な減資が行われた。³⁶⁾このような状況下にあって、服部と川村家との間に油絵販売委託および金銭借用の契約が行われたのであった。

この契約が交わされた明治35年5月は、井桁商会にとって一つの区切りの時期であった。この時井桁商会の貸金整理問題をめぐり三井物産本店と名古屋支店との間にある摩擦が生じていたことが、三井物産の社内会議資料から確認される。³⁷⁾当時井桁商会には、三井物産本店営業部から約1万円超、同社名古屋支店から8千円余もの貸金が行われていたが、この回収には三井物産が井桁商会の持つ工場および織機を引き取りこれを償却することで解決が図られることになった。ところが、名古屋支店側から本店営業部に対しこの貸金分を支店の勘定から除外し本店の勘定に移すべきであるとの意見が出され、三井物産本店はこれを受け容れる決定をした。その理由を、名古屋支店長寺島昇は本店営業部長福井菊三郎に対し次のように言っている「井桁商会ノ契約ハ元来重役ニテ直接御取結ヒ相成其取扱ヒ方ヲ各店ニ被命候事ニテ、各店ハ取扱ヒ手数料ヲ以テ取扱ヒ来り候次第ニ有之、当店モ其一部分ニ御座候、又同商会エ貸付タル八千円ハ其砌リ重役ノ御指令ニ基キ貸付タルモノニ有之、当支店ノ勘定ニ相成ルベキモノニ無之候」。この意見からは、井桁商会の設立と運営には三井物産本店の主導が大いに働いていた実態がうかがえる。

このような経緯を経て三井物産本店営業部は井桁商会の整理問題をやむなく引き取るようになったのだが、整理にあたり井桁商会が川村家に行っていた貸付金の存在は会社にとって不都合なものであったであろう。そもそも井桁商会と川村家との契約の発案者は、おそらく松本常磐だったと思われる。彼は「松本常磐と云う人は画伯の両親に生活の資を送てゐられた」³⁸⁾といわれる。その松本が川村家の窮乏を救う

べく一計を案じたことは間違いないであろう。さらに上記の経緯からすると、当時本店営業部長の任にあった福井菊三郎もこの発案と実行に関わっていたのかもしれない。後に【資料5】で紹介する書簡中で松本は帰元に、清雄の作画料の引き渡しについて明治36年夏に福井が大阪へ転勤したために「旁御不都合の事と推察」と述べていることから、福井は東京において松本と連携して動いていたのではないかと考えられる。清雄の油絵販売斡旋には会社役員の親族への金銭的な支援というきわめて私的な事情が隠されており、三井物産としてはこれを表面に見える形で残すわけにはいかなかった。服部商会という会社の実像はまったく不明であるが、おそらく川村家への貸付金を井桁商会の会計から切り離し受け皿とするために服部が便宜的に立てた会社ではないかと考えられる。

なおこの半年後、三井物産の重役会は服部と松本に対し多額の解僱慰労金の支給を決定したが、その理由は物産が豊田式織機の製作事業に従事させるため社員の二人を罷役とし井桁商会を組織させたが当初有望と思われた事業がおもわしくなく「本人共ニ於テ却テ迷惑ヲ蒙リ（中略）而モ結局少ナカラサル損失ヲ醸シ候現情ニ有之、事情気ノ毒千万」というものであった。³⁹⁾その後の井桁商会は、松本と服部の両人が名義上社員として継続していくが、⁴⁰⁾明治38年（1905）の会社役員録には松本の名が消え彼の義弟と考えられる中野誘が社員として名を連ねていることが確認される。⁴¹⁾そして翌39年の役員録には、業務担当社員社長として服部一人の名が記されるようになる。⁴²⁾また松本服部合名会社も、松本と服部の両名義人のまま明治39年（1906）の役員録まではその名を見ることができているが、同40年以降は掲載が途絶えている。この前後に松本服部合名会社は解散し、井桁商会も名実ともに服部一人の経営になったものとみられる。

＜川村清雄が井桁商会に納めた作品＞

井桁商会および服部商会による川村清雄の油絵販売斡旋は、先の契約内容からみると、井桁商会が清雄の作品を預かり顧客に斡旋しあるいは揮毫の注文を受け、絵が売ればその手数料を川村家から取るというシステムであったと推測される。しかしターゲットとした顧客の層や販売ルート等の実態については、井桁商会側の資料が不明なため本論ではその具体像を明らかにしえない。ここでは「川村資料」の中で明らかにできる若干のヒントとなる事例を紹介したい。

まず、井桁商会が当時清雄の作品を数点所持していたことが確認できる資料がいくつかある。明治34年（1901）11月に開催された関西美術会第1回展覧会に出品された清雄の作品のうち、「天神社内」「寒牡丹」「秋景」「水神祭」「草花しづか」の5点が井桁商会所蔵とされている。⁴³⁾川村清雄宛横井時冬書簡（明治35年8月17日付 資料番号04001540）には「本願寺へ御出の節、服部商会より借入候而水神祭の図新法主ニ御みせ被成候てハ如何、ことニより候へハ法主買ハレ候半かと存候、さ候へは永く名家の珍宝となるべく候」とあり、当時この作品が契約の移行にともない井桁商会から服部商会へ移管されており売却可能であったことを示している。また後に紹介する【資料5】川村帰元宛松本常磐書簡には、松本が先年大伝馬町の井桁商会にあった「桜ノ木羅生門官女の油画」を見たことが記されている。大伝馬町という地名は東京・名古屋ともに存在するが、井桁商会が設立時に東京本店を大伝馬町に近接する新大阪町に置いていたことから、これは東京の大伝馬町を指すと判断される。井桁商会に保管されていた

これら川村清雄の作品は、おそらく清雄が井桁商会との契約に従って納め販売目的で置かれていたものであったと想像される。

次に、川村家の井桁商会および服部商会からの借金の実態と清雄の作品制作の一端を知ることができる資料を紹介したい。それは「油絵引当借入金受取通帳」と表題がある川村父子が井桁商会から借用した金銭の受け取りを記録した帳面で、明治35年（1902）2月から9月までが記されている。

【資料3】油絵引当借入金受取通帳（資料番号04001464 写真3）

（表紙）

「明治三拾五年第二月改 油絵引当借入金受取通帳」

一、金拾五円也（「婦元」印）二月分経費 （「服部正之」印）右正ニ受取候也（「婦元」印）

三十五年二（月欠カ）十八日 川村清雄代 川村婦元（「婦元」印）

一、金拾五円也（「婦元」印）三月分経費 （「服部正之」印）右正ニ受取候也（「婦元」印）

三十五年二月廿八日 川村婦元（「婦元」印）

金拾五円也

（「服部正之」印）右は二月分経費残金 正ニ受取候也

明治卅五年三月三日 川村清雄（「CK」サイン）

金五円 正ニ拝借候也 （「服部正之」印）中上川肖像引当

明治卅五年三月五日 川村清雄（「CK」サイン）

一、金拾五円也（「婦元」印）四月分経費 （「服部正之」印）右正ニ受取申候也（「婦元」印）

三十五年四月二日 川村婦元（「婦元」印）

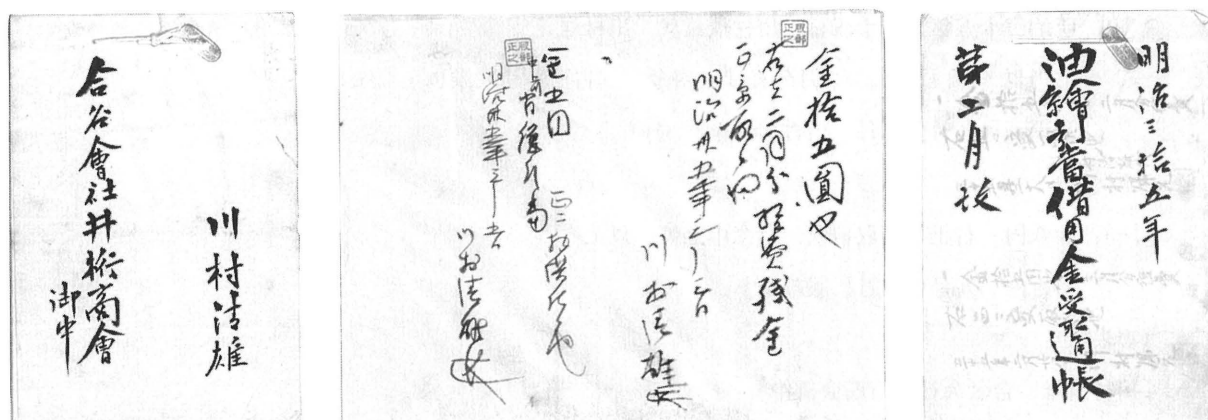
証

一、金貳拾円也 （「服部正之」印）右は三月分経費之内正拝借仕候也

明治三十五年三月廿七日 川村清雄（「CK」サイン）

証

一、（「服部正之」印）金五拾円也 右は三月分残并四月分経費之内正ニ拝借仕候也



【写真3】油絵引当借入金受取通帳（部分）
江戸東京博物館所蔵

同四月十二日 川村清雄 (「CK」サイン)

証

一、 (「服部正之」印) 金貳拾円也 (「婦元」印) 四月分経費ノ内 右正ニ受取申候也 (「婦元」印)

三十五年五月二日 川村清雄代 川村婦元 (「婦元」印)

一、 (「服部正之」印) 金拾円 (「婦元」印) 四月分経費之残 右正ニ受取候也 (「婦元」印)

川村清雄代 川村婦元 (「婦元」印)

一、 (「服部正之」印) 金拾五円 (「婦元」印) 五月分経費富士画額面差出シ 右正ニ受取候也 (「婦元」印)

川村婦元 (「婦元」印)

一、 (「服部正之」印) 金五拾円也 右は五月分経費として正に拝借仕候也

明治卅五年六月五日 川村清雄 (「CK」サイン)

一、 (「服部正之」印) 金貳拾円也 右は油画一对抵当として拝借仕候也

明治卅五年六月五日 川村清雄 (「CK」サイン)

一、 (「服部正之」印) 金拾五円也 (「婦元」印) 右油画額壹面代金トシテ御渡被成下正ニ受取候也 (「婦元」印)

明治卅五年六月十七日 川村婦元 (「婦元」印)

一、 (「服部正之」印) 金五拾円也 (「婦元」印) 六月经費 右正ニ受取候也 (「婦元」印)

明治三十五年七月三日 川村清雄代 川村婦元 (「婦元」印)

一、 (「服部正之」印) 金拾五円也 (「婦元」印) 七月经費 右正ニ請取候也 (「婦元」印)

明治三十五年七月三日 川村婦元 (「婦元」印)

一、 (「服部正之」印) 金拾五円也 (「婦元」印) 八月经費 右正ニ受取候也 (「婦元」印)

明治卅五年八月廿五日 川村婦元 (「婦元」印)

一、 (「服部正之」印) 金貳拾円也 (「婦元」印) 七月分之内 右正ニ受取候也 (「婦元」印)

明治三十五年八月廿五日 川村清雄代 川村婦元 (「婦元」印)

一、 (「服部正之」印) 金貳拾円也 (「婦元」印) 七月分之内 右正ニ受取候也 (「婦元」印)

明治三十五年八月三十日 川村清雄代 川村婦元 (「婦元」印)

一、 金拾円 (「婦元」印) 七月分之内悉皆受取済 右正ニ受取候也 (「婦元」印)

明治三十五年九月十三日 川村清雄代 川村婦元 (「婦元」印)

一、 金七円也 (「婦元」印) 九月经費之内金 右正ニ請取候也 (「婦元」印)

三十五年九月十九日 川村婦元 (「婦元」印)

(下ケ紙)

「一、 金八円 右正ニ請取申候、為念申上候、以上

川村内 九月廿九日 服部様」

(裏表紙)

「川村清雄 合名会社井桁商会御中」

通帳には、日付ごとに金銭の授受を確認する「服部正之」(服部種次郎と思われる)印と「婦元」印
ないしは清雄の「CK」サインがみられる。この内容をまとめると【表】のようになる。左の欄に清雄

の借入金の内容を、右に帰元の借入金の内容を示した。まず清雄の方をみると、月を追うごとに遅れ気味の傾向がみられるがほぼ毎月50円の経費を借用している。これは【資料2】の契約証に示される川村父子が借用する「毎月经費」と金額が一致する。4月までは清雄が自身で経費を受け取っているが、5月以降は帰元が代理で受け取ることが多くなった。またこれとは別に、3月5日には「中上川肖像引当」として5円、6月5日には「油絵一对抵当」として20円を借り出している。ここに見える「中上川肖像」とは、三井物産理事で明治34年10月に死去した中上川彦次郎の肖像画とみられ、当時清雄が中上川肖像の制作を受注していたことを知ることができる。一方帰元の金銭借用の動きをみると、こちらも契約書どおり継続して月15円の借金をしており、また服部との契約にもとづき5月と6月に油絵が1枚ずつ持参されていることが確認される。なお、中上川の肖像が明治35年時点で制作されていたということに関連して思い起こされるのは、その直前に清雄は中上川の叔父であった福澤諭吉の肖像を描いていたという事実である。「福澤諭吉像」（慶應義塾所蔵）は、彼の生前に制作を依頼されていたといわれる。⁴⁴⁾ 福澤

【表】 川村家による井桁商会（服部商会）からの金銭借用（「油絵引当借入金受取通帳」（明治35年）による）

授受月日	清雄分		帰元分	
	金額	摘要	金額	摘要
2月18日	15円	二月经費（帰元が代理受取）		
2月28日			15円	三月经費
3月3日	15円	二月经費残金（清雄が受取）		
3月5日	5円	中上川肖像引当として拝借（清雄が受取）		
3月27日	20円	三月经費之内（清雄が受取）		
4月2日			15円	四月经費
4月12日	50円	三月分残金四月经費之内（清雄が受取） *内訳：30円＝3月分、20円＝4月分		
5月2日	20円	四月经費之内（帰元が代理受取）		
不明（5月）	10円	四月经費之残（帰元が代理受取）		
不明（5月）			15円	五月经費 富士画額面差出シ
6月5日	50円	五月经費（清雄が受取）		
6月5日	20円	油画一对抵当として拝借（清雄が受取）		
6月17日			15円	油絵額面代金トシテ御渡被成下
7月3日	50円	六月经費（帰元が代理受取）	15円	七月经費
8月25日	20円	七月分之内（帰元が代理受取）	15円	八月经費
8月30日	20円	七月分之内（帰元が代理受取）		
9月13日	10円	七月分之内悉皆受取済（帰元が代理受取） *【資料4】「勘定書」に9月10日付で5円、9月12日で5円を借用		
9月19日			7円	九月经費之内金 *【資料4】「勘定書」にもあり
9月29日			8円	*【資料4】「勘定書」には「九月经費残」とあり

は明治34年2月に死去したが、その時点で画はまだ完成していなかった。その年の9月に清雄に宛てた横井時冬の書簡に「福澤先生御肖像御出来のよし御報ニ接し是非拝見いたし度存候へとも、今日より稽古始有大多忙ニ付乍残念参上いたし兼候⁴⁵⁾」とあり、この頃に一応の完成をみたと考えられる。肖像の注文主は福澤の娘婿清岡邦之助で写真家小川一真の仲介によるものとされているが、清雄が肖像を制作した場所が当時京橋横町に所在した三井物産の社屋内の一室であったという話は注目される⁴⁶⁾。当時清雄の画室は角筈の居宅にあったが、一部は三井物産社屋の一室を画室に使用していたのかもしれない⁴⁷⁾。

以上のごとく井桁商会によって行われた清雄の作品の斡旋販売の実態を見てきたが、この販売システムは当然清雄が契約通りに油絵を描き納品することができて成り立つものである。以前から遅筆ゆえに注文主をしばしば怒らせ悩ませてきた清雄の性格では、早晩破綻することは容易に予測できる。また清雄が作品を納めてそれが売れない限り、川村家の負債が軽減されることはなかった。次に川村家が井桁商会との契約以後どれだけの負債を抱えていったかを見ていきたい。明治35年(1902)10月1日付で服部商会が清雄に出した勘定書を下に示す。

【資料4】勘定書(資料番号04001467 【写真4】)

(「合名会社井桁商会東京出張所」罫紙を使用)⁴⁸⁾

勘定書

一、金八百四拾壹円貳拾八銭五厘(「服部正之」印) 三十五年八月三十日貸金元高

九月十日 金五円也 七月分経費残内渡

〃 十二日 金五円也 七月分経費残皆渡

〃 十九日 金七円也 九月分経費ノ内川村婦元氏分渡

〃 三十日 金八円也 九月分経費残川村婦元氏分渡

〃 〃 金七拾五銭也 日本銀行及四ツ谷川村方行人力代

メ 金八百六拾七円〇参銭五厘也(「服部正之」印) 九月三十日差引尻元金

金拾参円〇〇六厘也(「服部正之」印) 元金百六拾七円〇参銭五厘ニ対スル九月分利子

総計金八百八拾円四銭壹厘(「服部正之」印) 九月三十日貸金高

右之通り御座候也

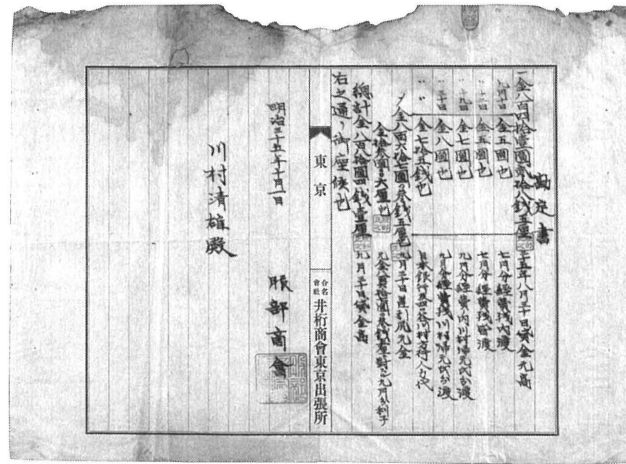
明治三十五年十月一日 服部商会(「服部商会」印)

川村清雄殿

これをみると、川村家の負債は8月末時点ですでに841円28銭5厘にまで達しており、9月にはさらに経費として借り入れた25円75銭が加わって、計867円3銭5厘の累積となっている。このうち油絵を抵当にした借入金と思われる167円3銭5厘については、利子13円6厘が計上された。ここまでの情報を総合すると、川村父子は経費の名目で毎月借金を重ねる一方で油絵の納品は順調にいかないため返済が追い付かず債務が焦げ付く状況に陥っているさまがうかがえる。

<富田鉄之助肖像の制作をめぐるトラブルと井桁商会>

さて次に、井桁商会が川村清雄の油絵制作を受注したと考えられる事例が、「川村資料」中から見出



【写真4】 勘定書
江戸東京博物館所蔵

される。それは富田鉄之助肖像の受注に関するものである。明治36年（1903）9月松本常磐は帰元に宛てて次のような手紙を出した。ここにその全文を掲載する。

【資料5】 川村帰元宛松本常磐書簡（資料番号03002048 【写真5】）

（端裏書 帰元朱筆）

「松本返書 九月十九日付 同廿一日午後到来 帰元」

如仰秋冷相催し朝夕ハ大ニ凌能く相成候得共、先以皆々様には御安寧恐賀仕候、次ニ当方一同無事、かくも常太等帰京の節同行出京致度申居候得とも何分身体も自由ニ相成兼候迄今度ハ見合せ申候、併しかく病氣も殊更ニ悪しく相成ノ次第にも無之候、乍憚御安神被下度候、

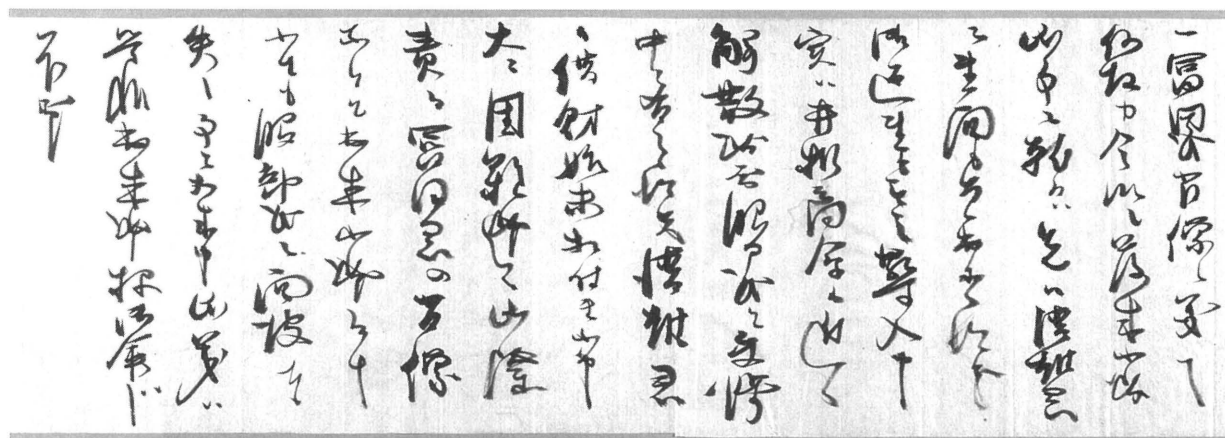
扱又安田より毎月御渡金の義は、実ハ是迄の通り御取計ニ相成事と存居候処、安田ハ外国へ一時出張今以帰京無之候由、其内福井ハ大坂支社ニ転住、旁御不都合の事と推察罷在候、然ルニ福井氏より別注文有之小児の肖像相認候事ニ御咄合相成候由、当方にては何月分迄御渡し申上候敷も相分り不申、何れ安田氏帰京次第報告も相成候事ニ致し候得ども、差向き御困難の事も御察し申上候、就而ハ九十月分ニ引当油画二枚又ハ三枚御差送り被下度、二ヶ月分御送金可致趣き承知致候、御都合次第にて御差廻し被下度、到着次第代金ハ直様差送り可申候、桜ノ木羅生門官女の油画ハ、先年大伝馬町井桁商会ニ参居候事有之、此品に無之候や、若しも此品なら御差送り之義御見合せ被下度他ニ御認メ相成候分ニ有を以御差送り被下候而差支無之候、

一、富田氏肖像之義は何故カ今以て落成不致、此事ニ就而ハ先つ清雄君ニ書面も差出居候得ども御返書も無之驚入申候、実ハ井桁商会も近く解散致度服部氏と交渉中ニ有之候得共、清雄君の借財始末相付き不申大ニ困難致候、此際責而富田君の肖像なりと出来不致候ては小生も服部氏ニ面皮を失候事ニ相成申候、此義ハ是非出来致候様御命じ被下度候、

一、誘方ニ而男子出産一同歓居申候、父の生れ変りと存じ又蔵と名称致度様かくより申通じ逐て右様取計候由御座候、先ツ御返事迄申上候、草々

九月十九日 松本常磐

川村帰元様



【写真5】 川村帰元宛松本常磐書簡（部分）
江戸東京博物館所蔵

この書簡は年紀を欠いているが、中野誘の男児誕生を報せているところから明治36年であると判断できる。前半部分については次項で触れるが、ここでは後半の富田像に関わる部分を見ていただきたい。この書簡で松本は、清雄に依頼している「富田氏肖像」について一日も早く完成するよう督促している。その理由は、井桁商会が近く解散を検討しており清雄の借財の整理がつかなければ自分が服部に対して面目を失うというのである。

「富田氏」とは、日本銀行第2代総裁富田鉄之助のことである。富田は仙台藩の出身で、勝海舟の門下となり、慶応3年（1867）米国へ留学する海舟の長男小鹿に随行して同じく海舟門下で庄内藩士の高木三郎とともに渡米した。やがて小鹿がアナポリス海軍兵学校に入学すると、ニューアークの商業学校に入学し、のちに商法講習所の教師として日本へ招かれることになるホイットニーに師事して会計学を学んだ。その後ニューヨーク領事館で副領事を勤め、さらに上海総領事・英国公使館一等書記官などを歴任した。明治14年（1881）に帰国して大蔵省に入り、翌年日本銀行が開業されると副総裁として迎えられ、同21年（1888）には総裁に就任している。翌22年に総裁を辞してからは、貴族院議員および東京府知事となった。清雄との縁も深く、清雄ら留学生一行がアメリカへ到着した時には現地で彼等を迎え、清雄が勝海舟邸内に画室を建ててもらった時には、富田が清雄に海舟の肖像をモチーフとした「江戸城明渡の帰途（勝海舟江戸開城図）」（資料番号85200434）を描かせ、その代金をもって費用にあてたとい⁴⁹⁾う。

この富田の肖像の制作を日本銀行が清雄に依頼したのだが、その斡旋は松本と服部によるものであることがこの資料から判明した。これは井桁商会による清雄の絵画販売斡旋の一事例と解釈される。最初に依頼された時期は不明だが、清雄宛横井時冬書簡（明治35年9月28日消印 資料番号04001529）に「富田氏の肖像出来候哉、極而大作故御手間たるべし」とあり、少なくともこれよりずっと以前のことでありと推測される。また【資料4】勘定書の内訳にある「日本銀行及四ツ谷川村方行人力代」というのも、富田肖像に関する話し合いで帰元が日本銀行に赴いた時の人力車代であったと考えられる。ところが、それから1年後の明治36年9月に至ってもいまだ富田の肖像は完成をみていない。松本は清雄に督促の手紙を出したが何の返事もないため、父の帰元に相談してきたのである。服部も名古屋から帰元に

手紙をよこし、「先日御打合せ申上候清雄殿一条ハ更に相運不申残念至極ニ御座候、十中八九と出来上候由ニ付、少シク本氣ニ被成候ハ、別ニ心配之事も無之と相考候、吾々兩人（松本と）の心情も御汲取被下れ速ニ先方へ引渡相叶ヒ候様御相談被下度候、左ならてハ松本も小生も日本銀行ニ対し信用を失し心外の次第ニ付、是非一兩日中ニ引渡の手續きに相成候様御尽力奉願候」（明治36年9月21日付 資料番号03002043）と、完成の一步手前で筆が進まない清雄への苦情を述べている。

この時松本と服部が富田肖像の納品を非常に焦っている背景には、納期の遅れだけでなく、書簡の文面にあるようにこの時井桁商会が解散の検討に入っており、清雄の負債整理の如何では商会の清算に影響がおよぶという問題に直面していたことにあったのである。木村駿吉が著した『川村清雄 作品と其の人物』は、富田肖像のエピソードとして「曾て日本銀行から前総裁富田鉄之助氏の肖像を頼んだことがあるが、その当時としては銀行として八百円と云う、可なり多額のお礼をしたのだが、画伯の手に渡ったのはその三分の一ほどであった。あいつは貧乏だからこの位やって置けばよからう位に、仲介人から見込まれたものであろう。」⁵⁰⁾という話を紹介している。しかしこれは、富田肖像の仲介者である井桁商会が、日本銀行から支払われた代金の大半を清雄の負債整理にあてたと解釈するのが真相に近いのであろう。

なお、富田の肖像は結局完成をみたのだろうか。清雄が死去した時に追悼文を寄せた関巖次郎（如来）は「いま川村さんの傑作として完成されたもの、うち、僕の記憶に存するもの」⁵¹⁾の一つとして富田鉄之助肖像をあげている。日本銀行は関東大震災のおり、建物は無事だったが周辺でおきた火災に巻き込まれて本館の内部が焼け多数の什器や資料類を失った。⁵²⁾清雄の描いた富田肖像がもし完成して日本銀行に納められていたのならば、このさいに焼失してしまったものと思われる。現在日本銀行に掲げられている歴代総裁の肖像画のうち、富田鉄之助像の作者は岡田三郎助である。⁵³⁾

以上、井桁商会による川村清雄の油絵販売斡旋というこれまで知られていなかった事実について紹介してきたが、清雄はこのような商業的な販売システムには全く適応することができない画家であった。富田鉄之助像の制作をめぐるトラブルと同様の事件は、清雄の画家人生の中で他にいくつも伝えられる。おそらく顧客たる実業界からも非難の聲が渦巻いたことであろう。伊原青々園と目される人物が雑誌「趣味」で川村家の没落と清雄の自暴自棄な生活ぶりを暴露する「悲惨なる画家の半生」を書き、広津柳浪が『絵師の恋』および『自暴自棄』の二部作を刊行したのは明治39年（1906）のことである。木村駿吉は、清雄が受けた非難中傷について「川村画伯には前々から種々の非難が附まるとしてゐた。前金を受取っても中々画を描かないとか、頼んで置いた画が描けると他に持て行って売ってしまうとか、約束した時日を延期また延期で、低頭平身して謝罪するのが平気だとか、金を受取ってしまってから途中で描くのを止めてしまうとか、九分通り八分通り出来た画をその後完成しないとか、でかだん、づばら、うそつき坊主だとか、他の画家は聖人の様で、川村画伯独りが凡ての芸術家の欠点を負ってゐる様に云う。」⁵⁴⁾と憤った。さらに新派の新しい風を受けた次世代層の目には清雄の油絵は旧弊と映り、清雄が画壇を離れるとやがてその名さえも忘れられていった。その風潮に木村はまた「三越の喫煙室で長髪君を捕まえて、川村清雄と云う画家を知てゐるか尋くと、この頃は沢山画家が出来ますからなあとくる」⁵⁵⁾と嘆いた。晩年における清雄の作画は、世間の毀誉褒貶を超越した自在の境地にあり、まさしく孤高の名人画家と呼

ぶにふさわしいものであった。そして清雄の「画のことにかけては、絶対の自信、絶対の我儘、絶対の頑固、絶対の道楽」⁵⁶⁾をすべて受け入れ忍耐強く画の完成を待った者だけが、清雄の傑作を手に入れることができたのである。

3. 川村清雄の芸術を愛した親族たち

＜松本常磐の奔走＞

井桁商会による川村清雄の油絵販売斡旋は、富田鉄之助肖像の問題が整理される前後に終止符を打ったと推測されるが、松本常磐はその渦中にあってもなお川村家への支援方法を模索したようである。この項では、その後における親族とその周辺による川村清雄に対する援助の一端を紹介していきたい。

話が前後するが、再び前項【資料5】の松本常磐書簡に戻ってその前半部分を見ていただきたい。ここで松本は安田という人物による「毎月御渡金」について触れ、安田は海外出張中でいまだ帰京していないことや福井菊三郎が大阪支店へ移ったことで送金が滞り帰元が困っているであろうことを察し、さしあたり松本が油絵2・3枚を引当にして9・10月の2か月分の送金をするので了承すると言っている。さらに、その翌月の10月4日にも松本は帰元に手紙を送り、「月掛油画の事ニ付御申越之趣き拝承、御都合にて如何様にも宜しく、安田も帰京致居候筈候、其方え御引合被下候ても宜しく御座候」(資料番号03002047)と、安田の帰京を見計らって「月掛油絵」の件について打ち合わせをしている。

この安田という人物については資料上からは特定できないが、当時の三井物産社員の中に本店計算課主任安田錐蔵⁵⁷⁾の名が見える。彼は松本が明治30年(1897)に計算課から参事主任に異動してからの後任⁵⁸⁾であり、松本とのつながりは深い。またこの書簡に先立つ7月22日に、安田に対し台北支店等アジアの各支店に対する会計検査を行うよう秘密の辞令が発せられていることが確認され、⁵⁹⁾「安田ハ外国へ一時出張今以帰京無之候由」という書簡の内容と符合する。松本は、自分がよく知る安田に川村家への月ごとの出金と清雄の作品購入を頼み、安田もこれに応じたのであろう。「川村資料」中には、安田に納める絵に対する松本の感想が清雄宛の書簡に記されている。

【資料6】川村清雄宛松本常磐書簡(資料番号04001468 【写真6】)

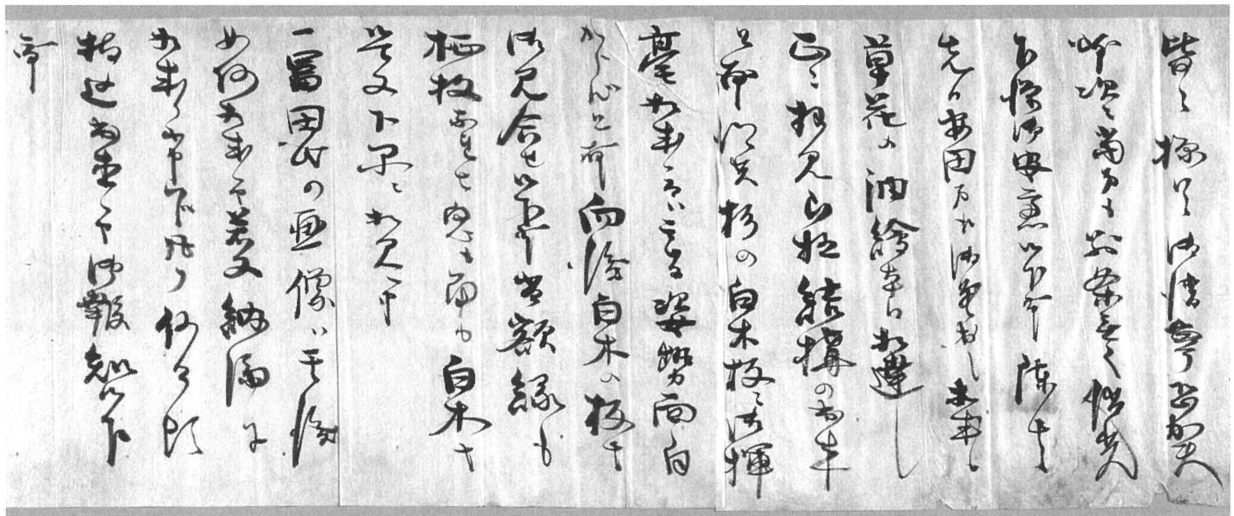
皆々様には御清寧恐賀致候、次ニ当方も別条無之消光乍憚御安慮被下度候、陳は先づ安田方え御差出し相成候草花の油絵本日相達し正ニ拝見、至極結構の出来と存候得共、杉の白木板ニ御揮毫相成候而ハ甚タ姿勢面白からずと存候、向後白木の板は御見合せ被下度候、尚額縁も桎板なれば兎も角も白木は是又下品ニ相見へ申候、

一、富田氏の画像ハ其後如何相成候や、若又納済に相成り不申候ハ凡ソ何日頃持込出直候や御報知被下度候

一、先日御申越し相成候価格八十円位の額面ハ御着手中ニ有之や是又模様御聴かせ被下度候、先ハ用事迄申上候、草々頓首

五月廿一日 松本常磐

川村清雄老兄



【写真6】 川村帰元宛松本常磐書簡（部分）
江戸東京博物館所蔵

この書簡は年紀を欠き年代を特定しがたいが、松本が富田肖像の進捗状況を気にしていることから明治36年5月のものではないかと仮定しておきたい。書簡の中で松本は、杉の白木板を使用した板絵の意匠を「甚タ姿勢面白からず」と批判し、額の意匠に対しても「下品ニ相見へ申候」とクレームをつけた。清雄が当時精力的に研究を進めていた清雄の板絵は、いわゆる神代杉を用いてその木目を生かした味わいが当時好評を博していたが、今回は杉の白木を使用したことが不満であったようである。

さて、その後も松本はさらに川村家の親族内で協議し支援策をとりまとめた。彼は明治38年（1905）3月、入院中の「本郷大学病院」（東大病院）から帰元に宛てて次のような手紙を送っている。

【資料7】 松本常磐書状（資料番号03001054 【写真7】）

（封筒）

「市内四ッ谷区南伊賀町二十二番地 川村帰元様

本郷大学病院 松本常磐 三月五日

（帰元朱筆）

三十八年三月五日到来 答ハ後病院え行面会ニて申述ル」

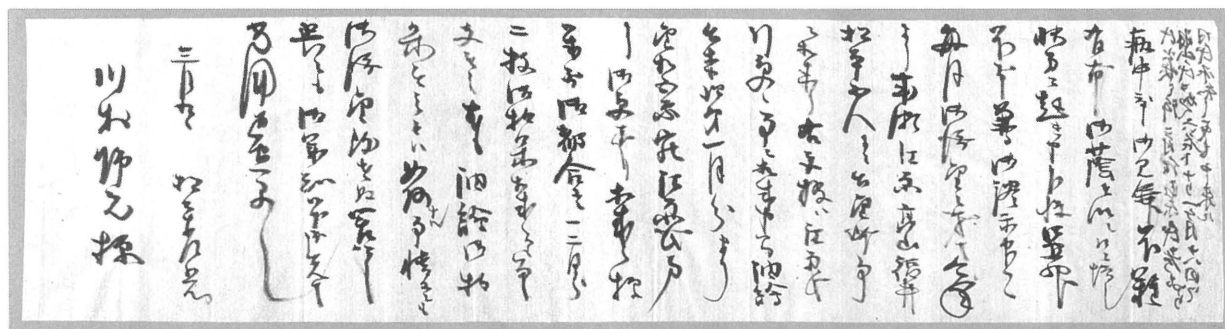
（端裏書 帰元朱筆）

「此書状之件ニ付服部原氏考もアリ羽山氏ヲ加へ六名トナリーケ月十八円ツ、同氏承知之義も申来ル」

病中度々御見舞被下難有存候、御蔭を以て日ニ増し快方ニ赴き申午憚御安神被下度候、兼而御談示申上候毎月御渡金之義は、今年より成瀬江原高山福井松本五人にて出金致候事ニ相成り、右取扱ハ江原氏引受候事ニ相成申候間、油絵出来次第一月分より金拾五円宛江原氏方に御受取り相成候様相成度、御都合にて一二月分二枚御持参相成ても差支無之、尤も油絵御持参無之候てハ如何ナル事情にても御渡金致さぬ筈ニ候、呉々も御承知被下度候、先は当用迄申上候、草々

三月九日 松本常磐

川村帰元様



【写真7】 川村帰元宛松本常磐書簡
江戸東京博物館所蔵

これによると、今年より成瀬隆蔵・江原素六・高山長幸・福井菊三郎・松本常磐の5人の親族が金を出し合い毎月15円を川村家に支給することが決定された。その取りまとめは江原が行う。その代わりに清雄は油絵を毎月1枚納めることが条件となり、画を持参しなければいかなる事情であっても金を渡さないという。さらにその後出金者に羽山鎭吉が加わり1か月につき18円が支給されることになったと、帰元が書簡の端裏に注記している。羽山鎭吉は、清雄の祖母たきの生家である旗本宮重家の出身で沼津兵学校附属小学校の体操教師を勤めのち陸軍少尉となって西南戦争で戦死した羽山縁の遺児で、母は和多田与八郎の娘で江原素六をキリスト教の信仰に導いた女性として知られる荊子である。⁶⁰⁾ 鎭吉は神戸で貿易商として成功していた。⁶¹⁾

これら6人の当世に名だたる実業家が集結して川村父子を支援しようとするさまはまことに壮観であるが、拠出する金額が一人月3円で合計18円というのは、前項でみた井桁商会および服部商会との契約において清雄が月ごとの経費として50円を借用していたことと比較すると、少額である。むしろ帰元が受け取っていた月15円の経費に近い。したがって、この出金の目的は、清雄に対する援助というより帰元夫妻の生活を最低限支えるための措置であったと思われる。川村清雄の生涯で終生克服されることがなかった窮乏生活に対して、清雄自身はむしろこれを楽しむところさえあったが、親族たちがここまで心を砕いたのは、父帰元と母たまの生活を案じたからに違いない。零落した川村家ではあったが、帰元は名奉行川村対馬守の流れを継承する一家の長老として依然親族内で要となる存在であった。清雄が明治4年春に徳川家派遣留学生として日本を離れた直後、国内では廃藩置県が断行され、秩禄処分によって士族はそれまで既得していた生計基盤を失ったが、その時代の荒波の中で不在の清雄に代わって川村家を守ったのは隠居の父帰元であった。帰元は、本来であれば当主である清雄が務めなければならない家政を万端行い、親族内で起きる諸問題には自ら相談に預かり面倒をみることもしばしばであった。かたや清雄は、当主としての責務を放棄し画の世界に没入するばかりである。アメリカの地で廃藩置県の報を知った清雄はこれに慨嘆する書簡を両親に送ったが、武士身分が解体する過程を清雄が目⁶²⁾の当たりにすることなく異国の地で自由な時を過ごしたことは、彼の社会的意識の形成において少なからぬ意味を持つように思える。苦難の時代をともに助けあうことによって乗り越えた川村家の親族たちの家に対する意識と清雄のそれとのギャップは明らかであった。そのような清雄に対し、親族の中でも江原素六はとりわけ厳しい目を向けた。下級幕臣から身を起し、戊辰の戦いを経て静岡での起業とその失敗と

いう苦闘の前半生を送った江原にしてみれば、卓越した画才を持ちながら名家川村家の危機にさいし必死の打開をしようとしないう清雄に不甲斐なさを感じるのは当然である。油絵の納品がなければ決して金を渡さないという江原らの姿勢は清雄には冷たく映ったであろうが、それは清雄に自身に課されている責任を果たしてほしいという親族たちの意思表示であったと思う。あるいは、親族たちを悩ませた一連のトラブルの後で、帰元がこれ以上の過度な援助を辞退したのかもしれない。松本の書簡からは、同族間の強固な紐帯と相互扶助を旨とする近世の武家社会における家父長制的「家」の論理や倫理観と、家族や親族とのしがらみに背を向け一個の画家として人生を貫こうとする清雄との間の相克を読み取ることができる。

ところで清雄は、木村駿吉に対して自分を支えた8人の恩人を挙げ「これ等は私の大恩人です、この外にも恩人は沢山あります、どうぞそのことを忘れずに書いて下さい」と頼んだ。⁶³⁾ その中には高山長幸と松本常磐の名が入っている。松本が川村家への支援に心を砕いた文字通り的大恩人であったことは、これまでにみたとおりである。木村は著書『川村清雄 作品と其の人物』に、ある人から頼まれた黒緇子の帯に御所車の絵を描いたさいの苦心のエピソードの中で、その下絵から清雄が松本のために油絵の額を描いたことを記した。⁶⁴⁾ 当館所蔵「川村資料」中には、木村の著作に紹介されるもの以外に、松本常磐ゆかりの作品の存在を新たに2点確認することができる。まず1点は、一人の武士を描いた作品の下絵である。清雄は、本画に着手する前に「七寸に八寸位の板に油で下絵を描いて荐りに研究され、その上句それを薄美濃に引延ばして着色をしてまた研究され、弥よと云う処になった本画に筆を執られた⁶⁵⁾」という。一つは板に描かれた油彩画（資料番号05003968 【口絵1・2】）、もう一つは料紙の上に着色され方眼線が入った下絵（資料番号01001288 【口絵3】）である。この絵について当館への収蔵当時は「木村摂津守像」とみる向きもあったが、その後に収蔵された写真（資料番号05650485 【口絵4・5】）の裏面に「三十三才皆川平恪」と書かれていたことから、これが松本常磐の伯父皆川平恪であることが判明した。なお、この写真を引き伸ばして方眼線を入れた図（資料番号05650486）も確認されている。また、板の下画の裏面には「明治三十八年四月吉日 川村清雄（花押）」の銘が記されており、この作品の制作年代が判明する。もう1点は、板に油彩で描かれ方眼線が残る下絵（資料番号05003967 【口絵6】）が資料中から見出された。こちらも当初人物比定ができなかったが、松本の肖像写真（【口絵7】）と照合した結果、これが松本常磐の肖像であることが分かった。なお、この絵は清雄が愛用していた画材商「文房堂」製の額に収められており、清雄がこれを自室に掲げていた可能性がある。

<高山長幸・福井菊三郎と清雄の作画>

松本とならんで清雄の恩人として名があげられている高山長幸は、「画伯のこの窮乏の間、高山長幸氏は常に理解と同情を以て画伯を援助され、年末などには川村が見えたら渡す様にと、大金を家族に托し置かることもあった⁶⁶⁾」という。もっとも清雄は「どうしたものか画伯は受取りに行かれなかった」。画の代金ならともかく慈善のために金を恵まれるようなことは、彼の自尊心が許さなかったのであろう。

清雄の親族の中でもっとも清雄の絵を愛好し蒐集したのは、高山長幸と福井菊三郎である。当時多くの実業家が芸術を愛好したのと同様に、高山も福井も美術の方面において深い趣味を持っていた。高山

は書画骨董の蒐集に努め、福井も茶の道に通じ自らの陶磁器研究の成果を『日本陶磁器と其国民性』(昭和2年)という著作にあらわした。この二人の江原の娘婿たちは生まれも同年で非常に親しく、相州二宮字梅沢という場所にある大洋を望む眺望の良い土地を共同で購入し隣り合って別荘を建てた。⁶⁷⁾高山は、かつて清雄をこの別荘に住ませたことがあった。高山の伝記『孤竹 高山長幸』には、「又疾くに川村画伯の画風凡ならざるを覚り、偶々同伯の身上に同情し永く二ノ宮別邸に静養せしめられたが、其間気の向く儘に画いて貰はれたのが其数大小幾十点に及ぶ、流石軽妙洒落な画面が多く、今日では鳥渡得難き蔵品と思ふ」と記されている。⁶⁸⁾この話は事実で、当館所蔵の「川村資料」中にも、相州二宮から後に清雄の妻となるふくに宛てた4通の書簡が残っている。それぞれ明治45年(1912)5月11日(高山氏にて 資料番号03001231)、7月17日(福井氏別邸より 資料番号03001230)、7月27日(高山様別荘にて 資料番号03001233)、7月28日(高山氏別荘 資料番号03001232)の日付で、帰京の日程について清雄の自宅の留守を預かるふくに連絡をしたものである。この年2月、清雄の母たまが死去しその3日後に父帰元が妻の後を追うように急死するという悲劇があり、清雄は激しいショックを受けていた。二宮滞在は傷心の清雄のために高山がはらかったものなのであろう。書簡の中で清雄は、「先日万々不快ニ候しももはや快く大ニはたらき居候」(7月28日書簡)と別荘で画の制作に励んでいる様子を記している。

さて、続いて高山と福井が愛蔵した清雄の作品について見ていきたい。まず高山の所蔵品を知る手がかりとなるものは、皮肉にも彼が私財を放出した入札会の目録中にある。大正11年(1922)末、高山が会長を勤める帝国商業銀行で、当時の深川支店長が貿易商との取引において独断で信用保証を重ね莫大な資本の欠損に至った事件が起き、翌年1月同行は高山ら3人の重役がその責任を取り私財をもってこれを補填することを発表した。⁶⁹⁾高山は15万円を補填することとなり、これを捻出するために自身が蒐集してきた古今の美術品を処分する決断をしたのである。大正12年(1923)4月30日両国の東京美術倶楽部で行われた入札会の目録「高山氏所蔵品入札目録」⁷⁰⁾には、467点におよぶ書画骨董がリストアップされ、その中に清雄の作品9点が挙がっている。内容は次のとおりである。

- ①草花二枚折屏風(目録番号170) ②題欠二枚折屏風(目録番号171) ③短冊絵 嵯峨野聯(目録番号172) ④板短冊絵 貧富聯(目録番号173) ⑤静物額(目録番号174) ⑥怒濤額(目録番号175) ⑦海浜祭礼額(目録番号176) ⑧銀地花卉二枚折(目録番号333) ⑨油絵大衝立(目録番号467)

なお上記のうち⑥は、静岡県立美術館所蔵の「波図」に比定されると思われる。他には、昭和2年(1927)5月に催された「川村清雄画伯全作品展覧会」に、高山長幸所蔵として「瀧」「菖蒲節」「黍と烏麦」「山」⁷¹⁾の4点が出品されているのが確認される。

次に福井菊三郎の蔵品について見ていきたい。福井家も高山家と同様に、襖絵や屏風類をはじめとする大作が多数所蔵されていた。木村駿吉は福井が秘蔵する清雄の作品について次のように述べている。「福井菊三郎氏の宅には九尺の鳥の子張りの襖二枚の大作がある。黒塗蒔絵の唐櫃と、能装束と、香袋と、鶴亀の冠と、高砂の面と、伊勢物語のかるたと、小猫とを描いたもので、十年来未了の処も残ってゐる。画伯は良く覚えてゐて、その中に完成すると言てゐられるが、福井家ではまだそれを他人に見せず秘蔵してゐると云うことである。この画も完成しないでこの儘の方が最高点にあるのかも知れぬ。福

井家の板戸二枚は十年間画伯の宅え預けられてゐて、画伯はその中に描きますと言ってゐられるが、（中略）さすが福井家には多くの逸品はある。向島花見の図の大作や、雌雄の鶏に時代瓦の図。衝立の表の金地には草花と水の流れ、裏の銀地には日の出に老杉。溜池の雨夜の図。二枚折金屏風には大根の釣干の図。犬と草花の図などで、内外の来賓から讃辞を受けると言って、主人は愛玩してゐる。⁷²⁾ また、【資料5】の文中に「福井氏より別注文有之小児の肖像相認候事と御咄合相成候由」とあるが、これは福井自身の子供の肖像かまたは福井の仲介で注文を受けたものなのかは不明である。ただし、「川村資料」中に福井氏息女とされる幼児の写真がある。⁷³⁾

福井邸は、大正初年頃までは麻布烏居坂二丁目にあり、その後赤坂表町、大正9年（1920）頃には青山見南町に移転したという。⁷⁴⁾ 木村駿吉『川村清雄』が執筆されたのは大正15年（1926）であるが、当時の福井邸は大正12年（1923）の関東大震災に遭いながらも無事で、その時点では清雄の作品もともに被災をまぬがれたものと思われる。昭和2年（1927）の「川村清雄画伯全作品展覧会」には、福井の所蔵する「能衣装」「花見」「双鶏」「雨景」「牡丹」「仕舞衣裳」と、木村の著作が記す内容にも対応する題名の作品が出品されている。

最後に、川村家の三井系人脈に連なり清雄の絵を熱烈に愛好した人物を一人紹介したい。それは三越の専務取締役日比翁助である。日比は久留米藩出身で慶應義塾を卒業、明治29年（1896）に三井銀行に入行した。その後明治31年三井呉服店に転じ、日本最初のデパートメントストアとなる三越呉服店を築いた。高山長幸の明治41年（1908）12月15日の日記に「早朝川村画伯来り、昨年新築の画室債権者のために差押へられんとすとして救助の相談あり。画室を失ふことは川村を殺すことなれば、大体承諾。（中略）三井銀行にて昼食、三越日比と会見。日比川村の画を愛重す。川村の窮境を訴へ、日比半金を出すことを快諾。⁷⁵⁾」と記されている。この年、清雄はそれまで住んでいた角筈から徳川家達邸にほど近い千駄ヶ谷に居を移した。それが転居早々差し押さえの危機に遭ってしまった。高山はこの年衆議院議員に当選したため三井銀行を退職したばかりであったが、年の暮れの早朝に駆け込んできた清雄の相談を受けて、早速三井銀行の同僚というよしみもある日比に協力を求め清雄の借金の肩代わりをしたのであった。清雄の芸術に対する日比の愛好ぶりは、自邸の杉戸に自らが敬愛する「シーザー」にまつわる画題の絵を清雄に描かせたエピソードがよく知られている。⁷⁶⁾ 日比は同じく三井銀行出身の高橋義雄とともに明治40年（1907）に三越美術部を設立したことで知られるが、高橋が岡田三郎助を重用し白馬会系画家との結びつきを強くしていたことと、⁷⁷⁾ 日比の川村清雄への傾倒とは対照的である。なお日比翁助と川村清雄との関係については、本研究報告に同じく掲載の田中裕二氏の所論も⁷⁸⁾ 参照されたい。

おわりに

最後に本論をまとめたい。

明治後期における川村清雄の画業を支えたパトロネージは、第一に川村家を取りまく親族関係を基本として成り立ち、なかでも江原素六夫妻とその親族たちを中心として主に三井物産をはじめとする三井系人脈によって占められていたというところに最大の特徴を見出すことができる。さらに当館所蔵の「川

村資料」中から、三井物産本店の主導により設立運営された紡織機の販売商社井桁商会が会社役員と川村家との親族関係を利用して川村清雄の油絵販売斡旋を試みたというこれまで知られなかった事例を発掘し、清雄と実業界をつなぐ接点を垣間見た。松本常磐らが仕掛けたこの事業は、当時の会社役員の親族の負債整理というきわめて私的な動機にもとづく特殊な事情に起因するものであったのだが、いまだ一般的な洋画市場が生まれない時代にあって、井桁商会という美術と無関係な商社が洋画の斡旋販売を行うという事業は、三井物産関係者をはじめとする新興ブルジョワジーの洋画への需要と潜在的な市場を意識したものであることは確かであろう。この事業自体は結局成功に至らなかったが、それまで徳川家や海軍省など華族・官僚が中心だった川村清雄の作品の受容者を実業界に広げる足がかりになったと考えられる。なお、一般にいうパトロネージの概念は、すぐれた芸術の保護育成を目的として芸術家に対し行う経済的あるいは精神的支援活動を指すが、これに照らした場合、川村清雄に対して親族が行ったさまざまな援助は、画家個人への純粋な芸術支援というよりも彼の背後にある川村家という「家」の再興への意識が強く働いており、若干ニュアンスの差異がある。今回本論で明らかにした川村清雄の事例が、果たして芸術のパトロネージと言えるかどうかについては異論があるかもしれない。しかし、画家が絵描きを職業として生計を立てている以上、画家の生身の人間としての生活と家族の問題は不可分であり、もちろんその前提には画家の才能と芸術に対する支援者たちの深い理解と賞讃がある。一見画家に対する使役や搾取と映る行動も、その根底には画家の芸術を愛し作品を世に広めたいとの思いから出るものであろう。川村清雄のこの事例の場合、広義の意味でのパトロネージと捉えても誤りではないと筆者は考える。一方本論で残された課題は、資料面での限界により油絵販売斡旋の当事者である井桁商会をはじめとする企業側の動きを明らかにすることができなかったことである。近代における実業家の洋画蒐集の全容は、一部の著名なコレクションを除きいまだ明らかになっていない部分が多い。川村清雄の作品を購入し愛蔵した人々は、三井系に必ずしも限定されず広く実業界に存在していたものとみられる。今後企業側の資料を調査することが必要であり、そこから発掘されるかもしれない新たな情報や作品に期待したい。

なお今後の展望として一言付け加えたい。先に筆者は海軍省における川村清雄の作画経緯について紹介したが、清雄の周囲を取り巻く人脈には「旧幕臣ネットワーク」が大きく存在する。近代日本の陸海軍の源流は、徳川幕府の軍制改革と人材育成にあり、維新後の静岡藩時代を経てここから数多くの有能な軍人や技術者が輩出し明治の技術立国の基礎を担った。また創業期の三井物産に多くの有能な人材を送り込んだ東京商業学校も、その創設には福澤諭吉・渋沢栄一・益田孝ら幕臣出身者が深く関与し、勝海舟の門下生である富田鉄之助が留学先で師事したホイットニーを教師として招聘し、ホイットニーの教えを受けた最初の卒業生である成瀬隆蔵がその教壇に立った。もはや稿を改めるほかはないが、清雄の熱烈なファンであった和田垣謙三や杉山令吉・横井時冬はいずれも東京商業学校で教鞭をとりあるいは教務にたずさわった学者たちである。三井物産における幕臣人脈はこれまでに見てきたとおりである。このようにして、川村清雄の周りには親族間の紐帯にとどまらず、その背後にある「旧幕臣ネットワーク」による強固な紐帯が大きな見えざる網を広げており、清雄が好むと好まざるとにかかわらず危機に直面するたびにこれらの人脈がセーフティネットとなって働いたのである。そして、彼らが清雄に対す

るパトロンの役割を果たしたことは言うまでもない。

さらに、近代日本の実業界の一角が旧幕臣層によって担われ彼らの一部が江戸的趣味を油絵の世界で巧みに表現する清雄の絵を愛したという事実は、川村清雄という画家の個性と美術界における立ち位置をおのずから規定するものである。江戸の世に幕を引き明治維新という変革の波にもまれ、ある者はいったん敗者となりながら苦難を乗り越えて新しい国づくりに尽した明治の第一世代の中には、西洋に順化する流れの中でも自国の文化の基礎となる江戸の遺風を捨てまいとする人々が少なからずいた。明治という時代は、美術界が前近代の日本美術の枠組みから脱却し新たな美術の形成が本格的な潮流となっていたが、その一方で益田孝が主催した茶会「大師会」に代表されるように、政財界人によって数奇者のサロンが形成され日本および東洋の古美術が盛んに蒐集され鑑賞・研究されたこと⁷⁹⁾、あるいは幸田露伴らが江戸趣味を共通項として集った「根岸党」の活動など⁸⁰⁾、まるで江戸の文人サロンが復活したかのような様相が生まれた時代でもあったことが指摘されている。この二つの相反するベクトルが志向するものは、川村清雄に対する同時代人の二分された評価と重なるように思える。清雄の芸術を支持した人々の特質を注意深く分析することは、その本質と日本近代美術史における位置を考える上で重要な作業ではないだろうか。

（補記）本論の執筆にさいし、江原素六を中心とする親族については、愛宕下美術館館長の三枝高次氏から貴重な情報提供をいただいた。末筆ながら深く感謝申し上げたい。

【註】

- 1) 三輪英夫「洋画界における新旧の対立」（日本洋画商協同組合編『日本洋画商史』所収 1994年）、田中淳「産業ブルジョワジーの台頭と洋画の大衆化」（同書所収）
- 2) 田中淳「産業ブルジョワジーの台頭と洋画の大衆化」、同「明治三十年の黒田清輝」（『画家がいる「場所」—近代日本美術の基層から—』所収 2005年 プリュッケ刊）
- 3) 山梨絵美子「三菱コレクションの洋画にみる近代美術のパトロンとしての岩崎家」（『三菱が夢見た美術館』展図録所収 2010年 三菱一号美術館）
- 4) 拙稿「川村清雄の海軍関係作品の制作経緯について—江戸東京博物館所蔵「川村清雄関係資料」および周辺からの検証—」東京都江戸東京博物館研究報告第16号 2010年）
- 5) 江原先生伝編集会『江原素六先生伝』（1937年）、「東京寄留書面類扣」（資料番号03000898）
- 6) 倉沢剛『幕末教育史の研究』（2）69頁 1984年 吉川弘文館刊）
- 7) 川村修就の日記「慶応戊辰日新記」慶応4年4月2日条に「加藤賢次郎順次郎同道ニテ来ル、続て清兵衛も来ル」（新潟市歴史博物館所蔵「初代新潟奉行川村清兵衛修就文書」史料番号546）とあり、この日からまもなく脱走したものとみられる。
- 8) 新潟市歴史博物館所蔵「初代新潟奉行川村清兵衛修就文書」史料番号548
- 9) なお、「東京寄留書面類扣」における縫子の川村家への送籍は、『江原素六先生伝』が記す江原との結婚年月日である明治5年（1872）2月15日より後の6月15日のことであり、江原との婚姻届も結婚から2年もたった明治7年4月（「三」を「四」に修正した痕跡がある）27日の日付となっている。この遅れの原因は不明だが、加藤家との調整や手続上の問題によるものかもしれない。
- 10) 明治4年7月5日（陽暦8月20日）父帰元宛川村清雄書簡（高階秀爾・三輪英夫編『川村清雄研究』178-9頁所収 1994年 中央公論美術出版刊）
- 11) 人名事典の多くは成瀬の生年を安政3年とするが、細谷新治『商業教育の曙』上巻 254頁（1991年 如水会学

- 園史刊行委員会刊)は、安政元年とする。なお、慶応3年に行われた昌平坂学問所における素読吟味受験者名簿「從十七歳十九歳迄之者四書五經小学素読仕候者姓名」(国立公文書館所蔵)に「陸軍奉行並支配成瀬範三郎 十七」と範三郎の名がみえる。範三郎の生年が安政3年とすればこの時の実年齢は数えて12歳のはずだが、当時の武家では子弟のいち早い出世を望んで実年齢より高い年齢で届け出て子弟を受験させることがしばしば行われていた。
- 12) 細谷『商業教育の曙』上巻 254頁、一橋大学学園史刊行委員会編『一橋大学百二十年史』30頁(1995年 一橋大学刊)、『明治人名辞典』上巻(「現代人名辞典」の復刻 1987年 日本図書センター刊)
- 13) 上野美代子著・上野信三編『主にまかせて 上野美代子回想録』36頁(2000年 私家版)。著者の上野美代子氏は、福井の五女である。
- 14) 松平太郎『江戸時代制度の研究』717頁(1964年 柏書房刊)
- 15) 細谷『商業教育の曙』下巻 323頁
- 16) 松縄善三郎『倭文はた 愛と奉仕の人々』65頁(2004年 静岡英和女学院同窓会刊)
- 17) 高山長幸の伝記には後藤朝太郎編『孤竹 高山長幸』(1928年)がある。以下高山に関する記述の多くは同書に拠る。
- 18) 「三井商店理事会議事録」明治30年12月17日(『三井事業史』資料編四上 123頁 1971年 三井文庫刊)、「同」明治31年5月13日(同書191頁)、「同」明治31年11月11日(同書312頁)
- 19) 大須賀町誌編纂委員会編『大須賀町誌』707頁(1980年 大須賀町刊)。なお三枝の実母せいの出自については、三枝のご養子である三枝高次氏からのご教示による。
- 20) 『江原素六先生伝』19頁
- 21) 『江原素六先生伝』101～105頁、『自叙益田孝翁伝』65頁(中公文庫版 1989年)
- 22) 木山実「明治前期における益田孝の人的ネットワーク」(同『近代日本と三井物産－総合商社の起源－』所収(2009年 ミネルヴァ書房刊))
- 23) 木山203頁、『江原素六先生伝』190～192頁
- 24) 木村駿吉『川村清雄 作品と其の人物』(以下『川村清雄』と略す)九、両親の失望(1926年 私家版)
- 25) 小笠原長生「洋画の天才川村清雄の逸話」(書道 第21巻 1934年)に「仍て其の当時は独身、…本当の一人ぼっちでゐた画伯と、忠実な青年の一門人とを近所の借家に住まはせ、毎日私方へ通はせては画を描かせ、一方では私の親戚や友人に頼んで、月がけで其の画を購って貰うことにした。(中略)画伯を知ってをる人達は、よく『川村があゝの当時位、キチンへと描いたことは無い。』と言はれる程でした。」とある。
- 26) 江原素六「售らん哉主義がいけない」(『江原素六先生伝』下巻87～90頁)
- 27) 「東京寄留書面類扣」(資料番号03000898)より明治27年6月11日付職業届
- 28) 「東京寄留書面類扣」より明治31年5月16日付で内藤新宿町への転居届が出されている。
- 29) 『三井事業史』本篇2 579～583頁
- 30) 由井常彦「三井物産と豊田佐吉および豊田式織機の研究(上)－名古屋支店と井桁商会および豊田商会について」(三井文庫論叢第34号 2000年)
- 31) 由井82頁
- 32) 由井常彦・浅野俊光編『日本全国諸会社役員録』第4巻62頁(1988年 柏書房刊)
- 33) 『豊田佐吉伝』104頁(1933年 豊田佐吉翁正伝編纂所刊)
- 34) 『日本全国諸会社役員録』第4巻196頁
- 35) 野末作蔵の回想「豊田翁と私」(『豊田佐吉伝』314頁)に「其後社員松本氏は退社し服部氏は相変らず事務に従事し居りたるも翁と意見が合はざりし為か、翁は断然退社して、元の武平町へ戻り又豊田商会なる名儀にて再び機織製作や織布製造に従事されたのです」とあり、松本が豊田の辞任以前にすでに井桁商会を離れたことがわかる。なお松本は、明治34年8月28日に台湾製糖株式会社の監査役に就任している(『台湾製糖株式会社史』296頁 1939年 台湾製糖株式会社東京出張所刊)。
- 36) 由井86～88頁、『日本全国諸会社役員録』第7巻 233頁
- 37) 「明治三拾五年上半季 会議案」所収 明治35年5月21日「井桁商会ニ対スル貸金ヲ本店勘定ニ移スノ件」(三井文庫所蔵 物産149)
- 38) 木村『川村清雄』三十、奈落の底
- 39) 由井常彦「三井物産と豊田佐吉および豊田式織機の研究」(中)93頁(三井文庫論叢35号 2001年)
- 40) 『日本全国諸会社役員録』第7巻 233頁、同8巻 229頁

- 41) 『日本全国諸会社役員録』第9巻 223頁。ここで松本と中野誘との關係について述べておきたい。三枝基の手による家系図によると、松本かくは川村修就の子弟のうちいずれかの者の子女であったとする。明治36年9月24日に帰元に宛てた中野楽遊の子息誘の書簡（資料番号03002038）では、男子誕生の報告をし「名ハ松本夫妻より命名致参り又蔵ト名付申候」、さらに姉の病状について「姉事時候のかげん例の痛所不出来の為め出京見合せ申候」と記している。一方松本常磐が同年9月19日に帰元に宛てた書簡【資料5】には、「かくも常太（松本の子：筆者注）等帰京の節同行出京致度申居候得とも何分身体も自由ニ相成兼迎今度方ハ見合せ申候」とあり、双方の情報が一致する。なお三枝作成の系図は、三枝高次氏からのご提供による。
- 42) 『日本全国諸会社役員録』第10巻 228頁
- 43) 村上勘兵衛編「関西美術会展覧会出品目録」（明治35・36年）。また、高階秀爾・三輪英夫編『川村清雄研究』口絵写真No.40・41・43・44・45に掲載。
- 44) 「福澤先生肖像」三田文学 1941年10月号
- 45) 川村清雄宛横井時冬書簡（明治34年9月11日の消印 資料番号04001523）
- 46) （註47）に同じ。肖像の額装をした銀座の額縁商八咫屋主人岩松鉦太郎の話として「福澤先生の肖像を川村清雄が描くやうになつたのは、清岡（邦之助）さんが福澤家に献上するため、小川一真が世話したのである。三井物産が京橋の横町にあつたころ、そこの一室で製作をつゞけてゐたが、途中で筆がすゝまなくなつてしまつた。」と書かれている。
- 47) 石川欽一郎「川村清雄氏」（『中央美術』第5巻第1号 1919年）に「先生が嘗て角筈に侘住ひされた折、一日お訪ねした処が、（中略）座敷へ行くには是非先生の画室を通過しなければなら無い」とある。
- 48) 設立当初の井桁商会は、東京が本社で名古屋が支店の關係にあつたが明治35年には会社の住所が名古屋のみとなっている（『日本全国諸会社役員録』第6巻228頁）。しかしこの罫紙の印字にみるように、東京の拠点はある時期まで出張所として存在していたようである。
- 49) 木村『川村清雄』十九、悪評
- 50) 木村『川村清雄』二十、謝礼
- 51) 関巖次郎「嗚呼、川村清雄さん」（『美之國』第10巻7号 1934年）。なお、那珂川町馬頭広重美術館が所蔵する、清雄が作画のために方眼線を入れた「男性肖像写真」（同館「近代洋画の先駆者 川村清雄」展図録48頁）は富田鉄之助の肖像と思われる。
- 52) 吉野俊彦『日本銀行史』第5巻1001頁（1979年 春秋社刊）
- 53) 吉野俊彦『忘れられた元日銀総裁－富田鐵之助伝－』口絵写真（1974年 東洋経済新報社刊）
- 54) 木村『川村清雄』十九、悪評
- 55) 木村『川村清雄』三、世に知られぬ名人
- 56) （註57）に同じ
- 57) 「三井物産合名会社職員録」明治36年（三井文庫所蔵 物産50-9）
- 58) 高橋弘幸「明治大正期三井物産における人材の組織形成」120頁（三井文庫論叢43号 2009年）
- 59) 明治36年7月22日「秘辞令案」（『明治三十六年從六月至十二月 會議録』（三井文庫所蔵 物産152）
- 60) 沼津市明治史料館「江原素六とその周辺（22）宣荊子・江藤寿子母子」（明治史料館通信 第40号 1995年1月）、三枝基「雑草」（1959年 私家版）
- 61) 「洋画家川村清雄と沼津兵学校の人脈」明治史料館通信 第60号 2000年1月）
- 62) 明治4年8月6日（陽曆10月19日）両親宛川村清雄書簡（高階秀爾・三輪英夫編『川村清雄研究』185-186頁所収）に、「廢藩之義ハ於日本國ニテハ尤美事文明開化之至ニ御座候得共只我輩之情ニおゐてハ実ニ殘懷之至ニ御坐候」と記している。
- 63) 木村『川村清雄』三十、奈落の底
- 64) 木村『川村清雄』十五、名人の作画
- 65) 木村『川村清雄』五、構図の研究
- 66) （註63）に同じ
- 67) 佐渡卓「相州二の宮偶感」（『孤竹 高山長幸』所収）
- 68) 伊藤利三郎「「高山さん」を偲ぶ」（『孤竹 高山長幸』所収）
- 69) 中外商業日報 大正12年1月27日記事「帝商の整理一歩を進む」
- 70) 東京国立文化財研究所所蔵

- 71) 「川村清雄画伯全作品展覧会目録」(資料番号05004166)、静岡県立美術館「静岡の美術Ⅶ 川村清雄展」図録 155～156頁(1994年)
- 72) 木村『川村清雄』三十八、力作
- 73) 福井菊三郎息女肖像(当館所蔵 資料番号03650071、05650476)。後者の写真の裏面には「明治三十四年十月」との記載がある。
- 74) 上野『主にまかせて』3-4頁
- 75) 後藤『孤竹 高山長幸』96頁
- 76) 木村『川村清雄』三十八、力作。
- 77) 岡部昌幸「芸術の「見世」としての三越」(『三越美術部100年史』所収 2009年 三越刊)
- 78) 田中裕二「明治後期の三越呉服店における日比翁助の企業経営と藝術支援 -百貨店経営理念の形成と美術的展覧会の理想-」(東京都江戸東京博物館紀要第1号 2011年)
- 79) 玉蟲敏子「<かざり>と<つくり>と絵画の位相」(『講座日本美術史』第5巻所収 2005年 東京大学出版会刊)
- 80) 山口昌男「明治大正の知的バサラ」(同『「敗者」の精神史』所収 1995年 岩波書店刊)